

□海外文献紹介□

Barrett 食道上皮にみる悪性化への進展と flow-cytometry, 組織学的な評価—内視鏡を用いた prospective な検討

Flow-cytometric and histological progression to malignancy in Barrett's esophagus: prospective endoscopic surveillance of a cohort: *Redio BJ, et al* (Gastroenterology 102: 1212-1219, 1992)

Barrett 食道は、重層扁平上皮に覆われた下部食道がほぼ全周性に、ある幅をもって化生円柱上皮に置き換わった病態で、発生に関しては慢性的胃液逆流がその一因として考えられている。また、Barrett 食道円柱上皮に由来する食道腺癌の報告例も数多くみられ、癌の合併を予知することは臨床的に重要である。そこで著者らは、Barrett 食道の悪性化への progression の可能性を推し量

る指標として flow-cytometry を用い、生検組織所見と対比しつつ細胞工学的な解析を行った。

対象は Barrett 食道患者 62 例(平均年齢 62 歳, 男女比 51: 11)で、prospective に平均 34 か月追跡検討した。また、組織学的には異型度の低いものから、Barrettmetaplasianegative for dysplasia (BM), indefinite/low-grade dysplasia (I/LGD), high-grade dysplasia (HGD), adenocarcinoma (Ca)と定義した。

最初の flow-cytometry による解析で aneuploid パターンまたは G 2/tetraploid 分画の上昇(>6%)を示した 13 例中 9 例に、観察期間中に HGD (4 例)や Ca (5 例)の合併を認めた。一方、上記の異常を示さなかった 49 例全例には neoplastic な変化を認めなかった($p < 0.0001$)。また、他の異常として S 期分画の上昇(>7%)がみられたが、統計学的に有意

な変化ではなかった。組織異型度の初期評価と flow-cytometry 所見との関係であるが、BM と診断された 39 例中 2 例が、I/LGD と診断された 20 例中 5 例が HGD, Ca に発展したが、共に flow-cytometry では aneuploid, G 2/tetraploid 分画の上昇パターンを示した。

以上より、Barrett 食道粘膜の悪性新生物への progression は、前述のような不安定なゲノムを有するクロソンの増生に起因するものと考えられた。最後に著者らは、組織学的な検討と flow-cytometry による分析を組み合わせることは、Barrett 食道の高度異型・腺癌の予知や早期発見に有用と結論づけている。

(愛知県がんセンター消化器内科

鈴木 隆史 抄)